灰

ろっぽん

僕が彼を初めて見たのは、今年の七月に行った永年勤続者表彰式の席上だった。この永年勤続者表彰式というのは、障害者が十年以上、会社に勤続した事を表彰するものだ。

僕は、養護学校を卒業してすぐに今、勤めている「ぽのす」という、パン製造兼喫茶店に十年間勤めた事が評価されて、表彰される事になった。それを知ったうちの親はすごく喜んでくれて、めでたいからという理由で表彰式に行く直前にわざわざ、母が赤飯を炊いてくれたくらいで、僕自身はそういう事をされて、照れくさかったが、嬉しいと同時に浮かれていた。

そのような浮かれ気分で表彰式の舞台である、僕の母校でもある養護学校にバスで向かった。家の近くの停車場から、僕がバスの中に入ってくると、一番、後ろの席にいた小学生らしい子供、三人が僕の周囲を指差して、馬鹿にしたように笑っていた。

僕は、自分の周囲の何がおかしいんだか分らなかった。そういえば、こんな事はずっと前からあった。今までは特別に何も気にしなかったのだが‥‥‥ とにかく、僕はそのまま空いている席を見つけて座った。

停車場から養護学校までは十五分くらいだ。その間、ipod で音楽を聴こうとしたのが、彼らは僕の周囲をまだ笑っていて、何だか分らないけど、その中の一人が耳が痛いのか、耳にヘッドホンを入れるような真似事みたいな事をしていた。それが何だか、痛々しそうであるんだけど、他の二人はそれを心配するどころか、笑っている。
そんな光景があまりにも気持悪くて、ipod から流れて来る音楽が耳に入らなかった。

バスが養護学校に着く頃には、バスに酔った事が無い僕が、気分的に酔ったようになっていた。降りてからバスをチラッと見ると、彼らは僕を見て手を振っていた。

それを見た僕は、原因は分らないけど、より一層の気持悪さを感じて、吐き気がした。それでも、養護学校の玄関に入る頃には、その吐き気はきれいに無くなっていた。
玄関に入ってすぐに表彰式の受付がやっていた。受付には僕の高校三年の時の担任である温水先生もいた。
彼がここでまだ、先生をやっているとは知らなかった。てっきり、もう転勤した

ものかと思っていたので、内心すごく驚いて、只、ボッーとしている僕に気付き、先生は肩を優しく叩きながら

「おお、直也！久し振りじゃないか。先生は嬉しいぞ、俺の教え子が表彰されて」先生にそう言われて、僕は何か言おうとしたけど、嬉しくて何も言えなかった。

本当は色々と言いたい事がたくさんあるのに。それを知ってか知らずか先生は続けて、

「いやあ、俺は、本当に嬉しいぞ、ああ、そうそう、司会も俺だからな」

「アッ、ソッそうなんですか」

「ああ、お前の晴れ舞台をしっかりと見てやるからな」

「アッアッありがとうございます」

「それでな、式が終わったら、色々と話したい事あるし、後で、俺んとこ来い」

「ハッハッハッはい、ワッ分りました」

それから、受付を終えた僕は、表彰式の式場である二階の会議室に向かった。会議室に入ると入り口近くの席で、僕が勤めている**ぽのす**の社長は誰かと喋っていた。何か、喋れなければいけない。そう思って言葉を絞り出すように叫ぶように「アッあの！シャ社長！今日は、ボッボッ僕なんかお招き」

ここまで言ったが、社長は僕の顔を一瞬だけ見て

「あっちだ、あっちに座って、待ってろ、ほら、お前の名前があそこに、大きく書いてあるだろ？」

そんな風に言われれば、その後は何を言ったらいいか分らず、すぐに社長が指で示した席に着いた。

確かに、自分の名前、白井直也の字が大きく書いてある紙が、窓際の席に貼ってあった。急いで、その席に座ろうとした。ふと、僕の隣の席を見ると、その席にも同じく名前が書かれてあった。『灰野誠一』と。その名前を確認するまではてっきり、僕だけが受賞できるものかと思っていたので、半分は残念に思った。

もう半分は、こんなすごい賞を独り占め出来る事によって、今後、**ぽのす**で注目を浴びるプレッシャーみたいなものを感じて、余計、働き辛くなるかも知れないとも思っていた。

なので、僕一人が受賞をしなくて良かったと安心した。

しかし、表彰式が始まるまで五分前なのに、まだ、彼は来ていないようだった。

いくら何でも、今日の主役の一人が来ないなんて事は無いだろうが、社会のマナーとして、ましてや、こういう大事な式典なのだから、せめて、五分くらい前には来ないといけないような気もするのだが……

そう思っていた時に彼がやって来た。僕は彼が隣の席に座ったら、社会のマナーとかを教えようと思っていた。けど、そんな考えは彼を一目見た時、消えてしまっていた。何故、消えたのか？彼の障害の程度は僕と同じくらいであるのは分る。脳性麻痺独特のよろけそうな動きであるけど、車椅子にも乗っていないし、クラッチという松葉杖みたいなものも使っていないからだ。それにも関わらず、彼に何も言えなくなったのは、彼の雰囲気だった。

僕は、養護学校出身だし、ぽのすも障害者中心の職場なので色々な障害者と会ったりしているが、彼、灰野誠一は、僕が今まで会った障害者のどこにも属していない感じを持っていた。喋った事も無い、しかも、一目見ただけで、そういうものを彼から感じ取ったというのは、明らかに変な事である。その事は正直、僕自身も信じられなかった。

同じ障害者にこんな事を言うのは、もしかたら失礼かも知れないけど、それを分かった上で言ってしまうと、彼の雰囲気はまるで、コウモリだった。明らかにこんな表現を使うのは間違っているかも知れないし、奇妙なような気もする。でも、実際、僕が彼に感じたのはコウモリのようなものだったから仕方がない。

毎日、太陽が沈む頃になると、どこからともなく現われる獣のような、鳥のような、薄気味悪い、あのコウモリだ。彼をこういう風に表現するのは、彼に対する侮辱かも知れないが、僕が彼に感じたものは、コウモリのような、薄気味悪いものだった。

周りの人達は、彼から発しているその薄気味悪い何かを感じ取れないのか、彼を見ても只、僕と同じように接していた。しかし、僕自身としては、彼との扱いを区別して欲しかったような気が、一瞬だけど感じた。でも、すぐにその考えを打ち消した。

何故なら、その考えは、彼に対する差別だったからだ。少しの間だけでも彼を、差別をした事に僕は自分が恥ずかしくなった。
それで、彼が隣に座った時に僕は彼に、イジメっ子が先生に注意をされ、イジメられた子に仕方なく謝るかのように喋りかけた。

「あ、ボッ僕、白井直也って言います、今日は、イッイッ一緒に頑張ろうね」
そう僕が言うと、彼は驚いたように急に僕の顔を見た。しかし、すぐに何事も無かったように、僕よりは少し吃るくらいの感じで僕に言った。
「ああ、そっそうだね」

素っ気無くそう言ってから、携帯をポケットから取り出して、いじり始めた。多分、メール確認だろうと思ったのだが、あまりにもルールから外れているような気がしたので、僕はこう言った。
「メールも、ダッダッ大事だけど、イッイッ今は、授賞式なんだから」
そう言うと、彼はすぐに、うっとうしそうにこう答えた。
「めっめっメールじゃねえよ、ゲームだよ」
ゲーム？ゲームをやっていたのか？最初、僕は母親にでも、メールを送っていたものだとばかり思っていたので、それならば、ある意味仕方ないと感じていたのだが、ゲームと聞いたら声を張り上げて、ゲームなんかしてんじゃねえ、こんな大事な授賞式の日に、と言おうと思った矢先に、マイクを持った司会の温水先生が、黒板の前に立ちこう言った。

「えー、これから、第六回、永年勤続者表彰式を行います」
温水先生のその声に、さっき感じていた彼の不満感が消え、代わりに、緊張感が自分自身に現われて来た。緊張している自分とは正反対に、隣の彼は携帯でゲームこそしていなかったが、リラックスをしているように感じられた。彼は、椅子にゆったりと自分の背を預けていたからだ。僕はといえば、この表彰式を支援している、障害者雇用推進協会という会の会長でもある、**ぽのす**の社長の挨拶や、僕の町の町長や職安の所長の祝辞も耳に入らなかったくらいに緊張していた。けど、温水先生の受賞者紹介の時に、自分の名前が呼ばれた瞬間に、その緊張は少しは溶けた。だが、自分はそれから、すべき事があったのに、すぐに、そこから動かなかった。やがて、もう一度温水先生の声が聞こえた。

名前を呼ばれて、ハッとした。そうだ、僕は表彰状を貰うんだ。急いで、協会の会長でもある社長が待つ表彰台に向かった。社長は表彰状を僕に手渡した時、小さい声で、だけど、優しくこう言った。
「おめでとう。これからも頑張れな」
そう声を掛けてくれ、嬉しくて、涙が出そうだった。でも、実際は、出なかった、白けてしまったからだ。つまらなそうに表彰状を受け取って、興味無さそうに席に戻るまでの彼、灰野君を見たからだ。何て、つまらなそうにしてるんだろう。

一体、何が彼をつまらなくさせるんだろうか？彼を見て、混乱していた僕を正すかのように温水先生が少し、声を大きくして、言った。
「次に、受賞者挨拶。白井直也」
それを聞いた時、不思議な事に自分の緊張が完全に溶け、さっき、名前を呼ばれた時とは反対に、すぐに椅子から立ち上がり、スーツの胸ポケットから紙を取り出し、それを読み始めた。

「僕は高校を卒業した後、今の会社、有限会社**ぽのす**に、就職をさせてもらいました。
最初の内は、何が何だか分らず、戸惑う事ばかりでしたが、会社の先輩の方々に優しく御指導を頂きました。この十年、色々とありましたが、これから、十年、二十年と今の会社、**ぽのす**で働きたいと願っております。最後になりましたが、

僕なんかの為に、このような授賞式を行って下さり、本当にありがとうございました」当然ながら、自分は吃りがあるので、紙に書かれた言葉をスムーズに喋れたわけではない。しかも、緊張の為、自分自身、何を言ったのか分らなかった。

でも、僕の挨拶が終わり、一礼をすると、大きな拍手の音が聞こえ、僕は、心から安心した。それをもっと安心させるかのように、温水先生がこう言った。
「では、これにて、第六回永年勤続者表彰式を終わります」

その後、町長や職安の所長らと一緒に、灰野君と写真撮影をした。後は自分はする事も無いので、帰ろうかと思い、廊下に出ると温水先生が僕に急いで近寄って来て、こう言った。
「何で、帰ろうとしてるんだ。話があるから俺んとこ来いって、言っただろ」
そういえば、そんな事を温水先生は言っていたのだが、すっかり、僕は忘れてしまっていた。

それで、正直にこう言った。
「スッスッすみません、すっかり、ワッワッワッ忘れていました」
「全くお前という奴は、表彰式でも、ボンヤリしやがって……」
「スッスッすいません」
「まあ、いい、それより、お前、今週の日曜、暇か？」
何かと休みの日は忙しい僕であるが、その日は、不思議な事に空いていた。それで僕は、すぐにこう言った。
「ヒッ暇、ですよ」

「そうか、それは良かった。実はな、俺な、障害者の為のサークルを作っていてな」
「サークル、ですか？」
「そうだ、こう言っちゃあなんだけど、暇を持て余している障害者が、休日を有意義に楽しんでもらう為に、色々と同じ趣味の仲間を作って、皆と楽しむサークルなんだけど。どうだ、お前も来ないか？」
「イッイッ行きます」
「そうか、じゃあ、パンフレット渡しておくからな、絶対、来るんだぞ」

しかし、僕はすぐに返事をして後悔をしていた。同じく、廊下に出て来た灰野君にも僕と同じように誘っていたからだ。正直、彼とはもう関わりたくないと思っていたからだ。折角の休みなのに、彼と一緒になるかも知れない。そう思うと、何とも言えない、嫌な気分になってしまい、日曜はずっと、家でボンヤリしていようかと考えていた。障害者余暇支援サークル、ひまわりのパンフレットを握りしめながら。

日曜というのがこんなにまで重く感じるとは、今まで思いもしなかった。原因は分かっている。コウモリのような、あの男、灰野誠一とまた、顔を合わせてしまうかも知れないと思うと、いつもは楽しくて、待ち遠しい日曜日がおっくうで仕方なかった、

しかも、今年はまだ、七月だというのに、熱中症で倒れる人が沢山いるというのに。だったら行かなければいい、何度も思ったが、それを思うと同時に、仮に、僕が行かなかったら温水先生を裏切るような気がして、嫌だったから、結局、昼食を食べたら、渡されたパンフレットを手にし、家を出た。

温水先生に渡されたパンフレットの最終ページに書かれてある地図を確認すれば、そこは僕の家から歩いて二十分くらいだった。自転車に乗って行ってもいいのだが、たまには、健康の為に歩いて行く事にした。

健康の為とはいえ、僕のフラフラとしている足では、かなり、きつく、暑かった。それで、目的地から半分の距離にあるファミリーマートに、休憩をする為に入った。中はヒンヤリとしていて、気持良く、いつまでも、そこにいたかった。しかし、そこにいつまでもいるわけにはいかないし、それに、只いるだけでは店員に悪いような気がしたので、十分くらい適当にマンガ本を立ち読みしたら、ジ

ュースを買ってそこを出た。

外は、相変わらずの暑さだった。しかし、エアコンが効いていた場所から出ると、周囲の空気が暖かく感じられた。それと同じように自分の心も温かく感じられ、何故か凄く嬉しくなって、気持ちも浮かれて、家を出る直前の憂鬱感もすっかり忘れてしまった。

そんな浮き浮きした気分で、さっきのジュースを飲みながら歩いていると、前方から親子連れが歩いているのが見えた。お母さんは僕より少し上くらいな年齢であって、男の子は幼稚園くらいだと思うが、男の子は僕の視界に入ると、彼は僕の方角を、興味深そうに、動物園で見た事の無い動物を見るような目で、見始めた。すぐに、その子の視線に気付いたお母さんは、男の子を叱って、何故か知らないが、僕の方角を見て頭を何回も、何回も下げて来た。男の子は何で自分が叱られ、何で自分のお母さんが謝っているのか分らずに、お母さんと僕の方角を、不満と不審の目で、交互に見比べていた。お母さんはそんな息子の腕を、無理矢理に引っ張って、その方角とすれ違うのは嫌だとばかりに、急いで曲り角を曲がって行った。

彼らとすれ違わなかった僕は、自分が関係しているわけでは無いのに、安心感と不快感が入り交じったような、奇妙な感覚に囚われてしまった。やがて、その感覚は、表彰式に行く時に乗ったバスで出会った、小学生くらいの男の子達を見かけた感覚に似ている事に気付いて、気持悪くなって、吐き気がした。表彰式から一週間は経ってなく、まだ、その感覚を鮮明に覚えていた僕は、余計、吐き気がして、すぐに、家に帰りたくなった。ひまわりに行く事をすぐに中断する事も出来たのだが、ひまわりは、地図によれば、もうすぐで着く筈であったので、頑張って行く事にした。

実際、吐き気を感じた場所からは、ひまわりまで、三分も掛からなかった。思っていたより何だか、パッとしなかった、というのが、そこの初めての印象だった。山小屋ではないが、何かそういう感じだった。心密かに思い描いたものとは全く違い、全く違った場所に来てしまったような気持だった。でも、その建物の木の看板には障害者余暇支援施設ひまわりと書かれていた。
確かにここだ、そう確信した時、後ろから驚くような大声で
「直也！来てくれたのか！」
あまりの声の大きさにビックリして、すぐに後ろを振り向くと、温水先生がいた。
先生は笑顔で続けてこう言った。

「いやあ、もしかしたら、迷子になったのかと思って心配していたよ、まあ、それはそうと暑かっただろう?とにかく、中に入れ、な?」
「ハッハッはい」
僕は先生に言われるまま、先生の後に続いた。まだ、誰もそこにはいなかった。温水先生は何をしていいのか分らず突っ立ったままの僕に、椅子に座るように促し、こう言った。
「ここはな、前も言ったかも知れねえけど、休みの日に何をしたらいいか分らないでいる障害者の為に、カラオケやボーリングとかのイベントをやったり、その中で同じ趣味を持った人とかもいるかも知れねえから、その人達と仲良くなるところなんだ」

先生が熱くなって、喋っているのを見ていると、先程の外の暑さ以上のものを感じて、部屋はクーラーが効いている筈なのに、体がまた暑くなってしまった。先生はそんな僕を知ってか知らずか、こう続けた。
「でな、お前、日曜とか休みの日は何してる?」
「え、ヤッ休みの日、ですか?えーと……」
その後は何を言ったらいいか分らなかった。休みの日は、テレビを見たり、ゲームをしたりとかはしているけれど、その程度の事は、誰でもやっているし、特別、言う程の事では無いように感じられた。何も言えない僕に対し、

温水先生は、やっぱり。といったような顔付になって
「結局、何もしてないんだろ?せいぜい、家でゴロゴロしてるんだろ?」
「エッ、ええ、まあ、そんなとこです」
「だろう?何か、それだと、折角の休み、もったいなくねえか?」
先生にそんな事を言われるまでもなく、ゴロゴロとしているのは、確かに、休みがもったいないと思う時もあるが、それは、ほとんどの人がそうではないかと思っていたので、今までは、特に何も感じなかった。でも、今、そう言われると、
折角の休みを、もっと、有効に使わないといけないと思った。
「なっ?そう思うだろ?」
いつまでも何も答えないでる僕に先生は確信を持ったようにそう言ったので、僕もそう思っていたところなので、素直に
「はい、タッタッッ確かに、モッモッもったいないと、オッ思います」
「うん、うん、そうだろうな、だから、俺はここを立ち上げたんだ」
「エッ、コッコッここって、先生が作ったんですか?」
「まあ、ここを作ったのは俺一人ではないけど、俺がここを作ろうと、最初に言い出した事は、確かだな」

温水先生が障害者の為に、そこまで考えていたなんて思ってもいなかったので、その事が本当に嬉しくなってしまった。そんな僕の思いを知ってか知らずか、温水先生は
「それでな、もし、良かったら、お前、来週も、暇、あったらでいいから、ここに来ないか？」
「ハッハッはい！絶対、来週も、キッキッ来ます」
そう即答した。僕のこの態度に気を良くしたのか、温水先生もこれでもかという位の笑顔で
「ああ、是非、そうしてくれ！知っている人間がいれば俺も何かと便利だから」
「ハッハッはい！」
僕がそう答えたとほぼ同時に、ドアが開く音が聞こえた。一瞬、あの男、灰野誠一かと思い、後から思えば、恥ずかしいくらい敏感にドアの方向に首を向けた。でも、開けた人はその男ではなかった。いや、女だった。四十くらいの眼鏡を掛けた優しそうな女の人だった。彼女は温水先生を見るなり
「こんにちは、今日は、お早いですね、温水さん」
「ああ、今日は、俺の教え子が来るから、早く来たんだ」
「アッ、そうでしたか、それで、彼、ですか？」
彼女に急に目を向けられ、恥ずかしくなって、僕は目をそらした。それに気付いた温水先生がすぐにこう言った。
「ああ、そうだ。彼が、俺の教え子の、白井直也っていうんだ。直也、彼女は、俺と一緒に働いている馬場さんだ」
馬場さんというその女の人は、僕に微笑み、
「はじめまして、私は、馬場って言います」
「ハッはい、はじめまして、アッ、ボッボッ僕の名前は、シッシッ白井直也、です」
「ええ、先程聞きましたから、分かっていますよ。白井さん。それより、何か、しましょうか？」
「エッ？何かって？」
そう言った後、僕は言葉に詰まった。何かしましょうか、と言われても、何をしたらいいか分らなかった。だけど、すぐに温水先生がトランプを机から出して
「じゃあ、ページワン、やろうか」
馬場さんはそれにすぐ、こう答えた。
「いいですね、やりましょうか。アッ、白井さんは、知ってますよね？」
「エッ、ええ、シッシッ知ってます」
こうして、僕らはページワンをする事になった。
後から温水先生に聞いたのだが、初めての人には自己紹介とかも兼ねて、トラン

プでゲームをするらしい。ゲームをしながら、初めての人の緊張を解きながら、親しくなっていく。それが目的だとすれば、僕も例外無く、ページワンをしながら、温水先生は元より打ち解けていたが、さらに打ち解けたような気もするし、馬場さんとも打ち解けられた。

今まで僕はトランプというのは只のゲームであって、まさか、このように人と人のコミニュケーションにも使えるとは思いもしなかった。どちらかといえば、賭け事に使うものと思い込んでいたので、僕はあまりトランプはしなかったが、こうやって、初対面の人達と打ち解けられる道具だと知ったので、仮にもし、あの男、灰野がここに今、来たとしてもトランプで仲を深める事が出来そうな気もしてきた。そう僕が思った矢先に、ドアが開かれた。ドアの前に立っていたのは、灰野だった。

灰野に気付いた温水先生は、すぐにトランプを止めて、
「あ、君は、確か、表彰式で会った……　わりい、名前、何だっけ？」
灰野は、面倒臭そうに、こう告げた。
「はっはっ灰野、です」
「そうか、灰野君、だったな。君も、トランプ、しないか？」
けど、灰野は、意外にも、いや、密かに僕が予期していた答えを温水先生に
「いっいっいや、えっえっ遠慮、しっしておきます」
すぐに、冷酷にそう答えられて、温水先生は返答に迷っていて、その後、しばらくは何も言えなく、その間、ひまわりは夏からいきなり冬になったようだった。温水先生は何も言えなくなっていた。多分、横にいた馬場さんも、何を言ったらいいか分らず、彼の様子を見ていただけだったが、すぐに気を取り直し、戸惑いながらこう続けた。
「下の方のお名前、お聞きして、いいでしょうか」
「せっせっせっ誠一です。灰野誠一、です」
「灰野さんですね、えーと、あっ、おいくつなんですか？」
「さっさっ三十、です」
三十？僕と同じ年齢だとは思わなかった。それで、思わず僕は
「アッ！じゃあ、僕と同じだ」
すかさず、温水先生も叫ぶように言った。
「あっ、そうだな、お前と一緒なんだな、歳」
普通は、ここから話が盛り上がる事が出来るかも知れなかった。だが彼は、普通、ではなかった。彼は、意外そうにこう言った。
「きっきっ君と、とっとっ歳、一緒か、そっそれにしても……」

「何？」
僕の顔を少しだけ見て
「いや、なっなっ何でもない」
彼はそう言った後、目を背けた。僕は何故か、彼の態度が気になってしまって、つい、強気にこう言った。
「ナッナッ何だよ、言えよ」
「いっいや、何でもないよ」
「でも、さっき、イッイッ言いたい事ありそうだったよね」
「‥‥‥いや、何にも、無いよ」
明らかに何か言いたい事があるのに、言わない。まるで、彼だけにしか知らない、僕だけの弱味を握られているような感じがして、段々と焦って来て、彼に叫んだ。
「なあ、ナッナッ何か言いたい事あるなら、イッイッ言えよ！」
自分が一生懸命に聞いているのに、僕の事なんか興味無さそうにしている彼を見て、怒りよりも、彼に対する恐怖でいっぱいだった。だから、少しでも、その恐怖を消す為に僕は彼に詰め寄っていた。僕は、もう何が何だか分からなかった。

それでも、分かっていたのは彼が怖いという事だった。灰野本人は僕に両手で襟首を掴まれているのに、焦る様子も無く、僕を冷静に観察しているかのように、何もせず、何も言わず、只、僕を眺めていた。こんなに叫んでいるのに。痛いくらいに襟首を掴んでいるのに。
僕は、もう、何が何だか分からなかった。

温水先生と馬場さんはしばらく、僕の事を唖然と見ていた。特に温水先生はここまで乱れた僕を見るのが初めての筈だった。やがて、馬場さんは只、見ている温水先生に、
「何をぼんやりしてるんですか！早く、彼を止めないと」

彼女がその言葉を言い終わるか、終わらない内に、温水先生は僕を後ろから、抱きすくめるようにして、大声で「おい！何をしてるんだ！落ち着け！」
僕は先生のその言葉で少し落ち着いて、周辺を見回した。驚く事に、彼はもう、どこにも、いなかった。

それに、すぐ気付いた僕は、思わず、先生に向かって叫んだ。
「アッアッあいつは！」
先生は、誰の事を言ってるのか分からず、何も言えずに只、呆気に取られていた。
僕はそんな先生がもどかしく、イライラとしながら、また、こう叫んだ。

「あいつですよ！さっきのあいつ、ハッハッは、いのお！」
先生も馬場さんも僕の急な変化が何が原因で、こうなったか分からなかった筈だ。馬場さんはそんな風に急に変化してしまった僕に、すっかり怯えてしまって、震えながら人さし指を、黙って左の方に指した。それを見た僕はすぐにその方向に向かって、走り出した。

僕は大声で灰野の名前を叫びながら、彼が向かったであろう場所に走っていた。近くにいた人達はそんな僕を心配そうに見ていた筈だ、何故なら、僕の事を見る視線を相当感じたからだ。その内、あまりにも焦ったせいか、ブロックにつまづいて、前向きに転んでしまった。
急いで、起きあがり、前を見ると、周りのほとんどの人が何が可笑しいか知らないけど、笑っていた。その原因が僕には分からなかった。分からないけど、その原因を少しでも考えようとすると、激しい頭痛に襲われた。激しい頭痛が僕を苦しめている最中、笑っている人達の中に彼が、いる事を確認した。それで思わず、こう大声で叫んだ。
「ハッハッは、いの！」

急に自分の名前を呼ばれた彼は、最初、誰を言ってるのか分からず、ボンヤリしていた。だが、すぐに、自分の事だと気付いた彼は、僕を冷たい目で見た後、黙って立ち去ろうとした。だけど、僕は、急いで立ち上がり、彼の肩を掴んだ。掴まれた彼はすぐにその手を振り払い、残酷にもこう言った。
「さわんなよ」
そのような冷たい言葉が、自分に掛けられるとは思わなかった。それで、僕は他にどうしようもなく、何も言えずに、そこに立っていた。彼はそんな僕をその場に置いて、立ち去って行った。何を考えて、何を言い、どういう行動をすれば正しいのか、僕には理解出来なかったし、自分の思考がはっきりするまで、そこに立っていた。でも、気付いてたら、僕は彼を追い掛ける為に、彼の向かった方向に走っていた。

後ろに僕がいる事に気付いているのか、いないのか、彼は近くの公園に向かっていた。公園に入って、彼はベンチに座った。僕はそんな彼を追い掛けて、目の前に黙って立っていた。灰野は少しおっくうそうに、座ったまま、見上げるように僕を見つめたまま、こう言った。
「どっどっどうしたの？何か、はっはっ話、あるんだろ？だったら、早く、何か、言ったら？」
確かに、僕は彼に話があって、ここまで追い掛けて来ていた。でも、実際、彼を

目の前にしたら、何を言ったらいいのか、分からなくなっていた。黙ったままの僕を見兼ねて、彼が言った。
「さっき、おっおっ俺が、君に、何を言おうとしていたか、だろ？」
そうだ、確かに、さっき、ひまわりで、彼が言おうとしていた事が凄く気になってしまい、彼に聞こうとしたが、教えてくれなかった。一体、何を言おうとしたのか？

「おっおっ俺と同じ歳の割には充分と、こっこっこっ子供っぽいなって。そっそっそれだけだよ」
「ソッソッそれだけ？本当に？」
「そうだよ、あそこで、きっきっ君に言いたかった事はね」
その言い方が何だか、他にもっと言いたい事があるのではないかというような感じだったのが、それを聞いてしまうと、自分自身が壊れてしまうようなものを、感じてしまった。それで、聞こうか聞かかないか、迷っていると、灰野はいきなり、こう訊ねて来た。
「きっきっ君は、よっ養護学校、出身なんだよね？」
何でこんな事を彼が突然、聞いて来たのか、その意味を考えて、僕は沈黙してしまった。そんな僕に、彼は続けざまに、確認するかのように質問して来た。
「しょっしょっ小中高、皆、そうなんでしょ？」
確かに僕は、小学校、中学校、高校と、同じ養護学校で過ごして来た。でも、養護学校出身である事は知っていても、そこまでは知らない筈だ。何で、彼はそんな事まで知っているのか？僕はそんな彼が、不気味に感じられた。僕はそれから、もう何も言えなくなって、しかも、自分が養護学校出身である事が何だか恥ずかしくなって来た。

それで、只、彼から目を背けたいばかりに、うつむいてしまった。
灰野はそんな僕の感情を全て理解しているかのようにこう続けた。
「うん、そうだろうね。でっでっでも、それが悪いって言ってるんじゃないよ。むっむっむっむしろ、きっ君にはピッタリ過ぎる環境を、てってっ提供してくれた筈だろうしね、養護学校は。だから、子供っぽくなったんだろうし」
正直な話、彼が言っている意味が分からなかった。しかし、理解出来た事は、自分の母校を馬鹿にされている事だけだった。僕は彼には何も言えなかったが、只、彼を睨んでいた。でも、僕なりのその抵抗を軽くあしらうかのように彼は、いかにも欲しいおもちゃを買えない子供を慰めるかのようにこう優しく言った。
「ごっごっごめん、ごめん。おっおっ怒っちゃった？なら、悪かった、謝るよ。別に君や養護学校を馬鹿にしているんじゃないからね。むしろ、養護学校はあっ

た方がいいとは思うよ。そっそっそれにさ」
「ナッナッナッ何か、イッイッ言ってる事、ムッ矛盾してるよね」
僕は彼を少し黙らせたかったから、こう言ってみた。正直、どこがどう矛盾しているのか言っている自分も理解出来なかった。でも、彼はすぐにこう応えた。
「たったっ確かに、言っている事は矛盾してるよ、それでも、僕は、よっよっ養護学校という、そっそっ存在には疑問を感じてるけどね」
僕は何か、彼の考えが妙におかしくなって、少し微笑んだ。そんな僕に彼は今度は自分が馬鹿にされているかのように感じたのか、顔の表情を強張らせ
「なっなっ何？なっなっ何で笑ってるの？」
「だって、キッキッ君の方が、ムッムッムッ矛盾しているから」
「むっむっ矛盾？僕が？」
「だって、キッキッ君も、養護学校出身なんでしょ？僕とは違う、多分、別の養護学校だろうけど」

そうだ、彼は矛盾している。彼も僕と同じ程度、いや、僕より重いかも知れない、そんな障害だから、養護学校に通うのは当たり前だし、実際に通っていただろう。県内にもう一つある養護学校に。彼は何も言わずに唖然としていた、それはそうだろう、

彼が言っている事は自分の母校すらも、廃止するという意味もあるのだから。僕は彼に勝ったと思った。だけど、それは、単なる僕の思い込みだった、彼が唖然としたのも一瞬だった。すぐに彼は何がおかしいのか分からないが、笑い出した、それも大声で。
いつまでも止まないその笑いは、どことなく、似ていた。表彰式に行く時のバスの中の小学生の笑いや、ひまわりに行く時の親子の態度に。僕は気持悪くなり、吐き気がしそうだった。僕はやっとの思いで、彼に叫んだ。
「ナッナッナッなにが、ナッ何がおかしい！」
彼は笑いをこらえながら、
「いや、だってさ、おっおっ俺がさ、養護学校？」
こう言った後、彼はずっと笑っていた。いつ笑いが止むのかという、そういう感じだった。彼が実際、笑っていたのは、時間にすればニ、三分くらいだったと思うけど、僕にすれば、三十分くらいの時間が立ったように感じられた。

ようやく、笑うのを止めた彼は、今にも笑い出しそうにしながら僕にこう言った。「ぽっぽっ僕は、ふっふっ普通の学校だよ」
普通の学校？養護学校に異常も普通もあるのか？まるで自分が普通ではないと言

われたような感じがして、僕は彼にこう言った。
「いや、だから、養護学校でしょ？」
それを聞いた彼は、今さっきまでの笑顔が見る見る内に曇っていった。そして、大声でこう叫んだ。
「だっだっだから、養護学校じゃねえ！しょっしょっ障害者がみんなみんな養護学校に通っていると思ってンじゃねえよ！」
彼のこの叫びに僕は最初、意味が解らず、一瞬だけ彼の顔を見たままになっていた。けど、すぐに彼が言った事が理解出来た。そうか、障害者全員が養護学校に通うわけではなかった。僕はその事は分かっていたし、健常者と一緒に普通学校に通って、頑張っている障害者を以前、テレビのニュースで観た事があったような気もする。だけど、それらは僕とは違う世界のような感じがして、すっかりその事を忘れていた。

そんな考えでいたので、それから僕は何も言えなかった。同じ国で育った同士なのに、彼が違う言語で話すような錯覚を、彼に感じてしまったからだ。何も言えないでいる僕に彼は優しくこう言った。
「ごっごっごめんね、いきなり、大声出しちゃって…… でもね、いっいっ今のは、君が悪いと思うよ、だって、ぼっぼっ僕を、養護学校出身だって言うんだから」

彼のその言い方は優しかった。でも、その優しさはどことなくトゲを感じられて、しかも、毒を染み込ませたような言い方だったので、さっきからの吐き気が倍以上になって来た。いや、吐き気どころか、実際、僕はその場で吐いてしまった。そういう事があったら、普通は心配するだろう、だけど、彼が僕に取った行動は、明らかな無視だった。正確に言うなら、只、延々と喋り続けていた。僕のこの状況が見えないと言わんばかりに。

吐いて疲労している僕を、無視して彼が喋り続けて言う事には
「しょっしょっ正直言うとね、僕も養護学校に入りたかったんだ。でも、何だか知らないけど、僕は小中高、ずっと普通学校だった。ふっふっ普通学校における障害者の立場って分かる？小学校では興味本位でイジメられて、中学校に入ると、多分、受験勉強や、しっしっ思春期とかのストレスとか溜まるかどうか分からないけど、とにかく、まあ、そっそっそういう感じのストレス解消の道具にされて、イジメられるんだ…… ていうかさ」

僕を心配してくれるのか？そう思ったが、すぐにそれとは全く違う言葉を放った。「なっなっなっ何、吐いてるの？くっくっくさいんだけど」
これを聞いた僕は彼を殺したくなった。初めてだった。そういう感情を人に向けるのは。しかし、彼は僕のこの感情を挑発するかのように、僕にこう質問した。
「どんな風にイジメられると思う？」
そう聞かれて僕はどう返答したらいいのか迷った。そもそも、イジメ自体も自分とは全く無関係なものだったので、何と答えたらいいのか分からなかった。しかし、ここで何か言わないといけないと思ったので、
「えっと、ナッナッ殴られたりとか？」
「うん、確かに、そっそっそれはあったよ。なっなっ殴られたり、けっけっけっ蹴られたりとかはさ。ていうか、それが、まっまっ毎日だったよ。だから、それは別にそんな、たったったっ大した事じゃないよ」
僕にとってみれば、異常に大した事だった。テレビドラマとかでそういう場面は観た事あったが、そのイジメのシーンがあまりにもひどくて、つい、テレビを消したくらいの僕だから、実際、イジメられた当人が目の前にいると思うと、何だか信じられなかった。しかも、彼にとってみれば、それらは大した事でないと言う。一体、他にどんなイジメを受けていたのか想像すらも出来なかった。

でも僕は、彼の話はもう聞きたくなかった。何故なら、彼の話を聞いていると、気持悪くなってしまうからだ。それで、適当に話を切り上げて、この場から逃げようと思い、こう言った。
「ソッソッそっか、大変だったね。じゃあ、ボッボッ僕は、ヨッヨッ用思い出したから」
そう言って、そこから逃げようとした。けれど、彼は僕を逃がさないとばかりに、勝手に話を進めていた。
「たったっ確かに、大した事ではないんだよ。暴力とかはさ。本当にきついのは、精神的なもんだよ」
精神的なもの？何だか言い方があまりにも思わせぶりだったので、逃げ帰ろうとした僕はつい、彼にこう訊ねた。
「セッセッ精神的なもの？」
「そっそっそう、精神的なイジメ。ていうかさ、用あるから帰るんじゃなかったの？」
「ソッソッそんな事はどうでもいい！さっさと教えろよ！」
彼はそんな僕をまたしても、馬鹿にしたように
「分かった、分かった、そう、怒るなよ、教えるからさ。で、どっどっどこまで話したっけ？」

「セッセッ精神的なイジメのところから」
「ああ、そうだったね。でね、その精神的なイジメってどういうのか分かる？」
「知らない」
「まあ、そうだろうね、しっしっ知らないだろうね。でっでっでも、多分、きっきっ君もちょっとは受けた事あるとは思うけどな。養護学校や家を一歩でも出たら、君も、たったっ只の障害者なんだから」
精神的なイジメを僕が受けていた？そんな事がほんの少しでも自分に対して起こる理由が見当たらなかったし、起こっていたとは到底思えなかったから、そんな事より彼が実際、受けていた精神的なイジメとはどのようなものなのかが知りたくてどうしようもなかった。

灰野は一つため息を吐き、
「せっせっ精神的なイジメっていっても、障害者の場合は二種類あってさ、まず一つ目は、けっけっ健常者でも起こりうるイジメ、もっもっもう一つは、障害者しか起こらないイジメ、多分、きっきっ君はそのイジメはもう経験してる筈だから、そっそっそれはあえて言わないけどね」
僕は僕自身が経験している筈のそのイジメの内容を聞きたかったのだが、彼は有無を言わせず、健常者でも起こりうる精神的なイジメの内容を勝手に話し始めた。
「僕ね、ちゅっちゅっ中学の時、同じクラスに、すっす好きな子がいてさ、その子にさ、こっこっ告白したんだよね、いや、無理矢理、させられたんだよ、僕をいじめていた奴に。告白をしないと殴るってね」
好きな子は、僕は高校の時いた。いたから、分かるのだが、そういう恋心は、大事にとっておくものだと僕は思う。だから、彼がどんな思いで告白をしたのか理解出来たような気もする。それで、つい僕はこう口走ってしまった。
「ソッソッそうか、それは、大変だったね、ムッムッ無理矢理告白をさせられて」
「いや、はっはっ話はこれで終わりじゃないよ。むっむっむしろ、精神的なイジメはここからだよ、それで、告白をしたけど、彼女の返事は、『好きな人がいるからごめんなさい』みたいな返事だった」
告白を無理矢理させられて、返事がノー。僕が彼だったら、次の日には自殺をしている。しかし、話はこれだけでは終わらなかった。
「まあ、わっわっ分かっていたんだよ、そんな事は。だから、別にその事自体は思ったより、せっせっ精神的ダメージは無かった。でも、次の日、学校に来て教室に入ると、黒板でデカデカと告白をした事が書かれていた。恥ずかしかった。告白をした事は悪くはないのに、周りのクラスメートも、イジメッ子を中心にその事をからかう、それが、あっあっ悪であるかのようにね。っっっっ辛かった。本当に辛かった」

確かに、それは辛い、だけれど、まだまだ、彼が受けた災難は、いっぱいあるような気がしたので、大人しく黙って聞く事にした。
「でも、本当に辛かったのは、その場に僕が告白をした女の子がいたんだけど、その子が、なっなっ泣いていた。僕のせいでこうなったのに、肝心の僕は、何もしないで立っている」
その後、彼は何も言わなかった。僕は、そんな彼に続きを促すのは、心苦しかったが、それ以上に話の続きが聞きたかったので、戸惑いながら聞いた。
「ソッソッそれで、どうなったの?」
「その場は、担任の教師が来て、治まったけど、ぼっぼっ僕へのイジメはここからだった、その女の子は、その騒ぎの後、すぐに学校を、そっそっそっ早退したんだ。それで、かっかっ彼女の女友達、二、三人が、ぼっぼっ僕に休み時間にこう言ったんだ。
『あんたが告白をするからこんな事になったんだ。責任を取って、どっか転校して』みたいな事をね。僕が嫌だと言ったら、そいつら、なっなっ何て言ったと思う?」
「さあ?ワッワッ分からない」
「だったら、無視するって」
「無視……」
「そう、無視。それから、僕は、クラスの男には徹底的に、なっなっ殴られたり、蹴られたりとかして、クラスの女には徹底的に、むっむっ無視されることになったんだ。卒業までにね。それで、僕が告白をした女の子はどうなったと思う?その後、一週間も経たない内に転校しちゃったよ。彼女が転校しなかったら、もしかしたら、無視もすぐには治まったかも知れなかったけどね」
僕が彼だったら、すぐに親に言って、何とかするかもしれないけど、彼は何でしなかったのか?親に頼れば良かったんじゃないのか?そうすれば、こんな問題、すぐに解決出来たのではないか?そう思ったが、その考えは彼の次の言葉で打ち砕かれる。
「もっもっもしかしたら、君、親に頼った方が良かったとか考えてる?ぼっぼっぼっ僕、中学の時はもう親はいなかったよ、親父もお袋も離婚しちゃってさ。僕を引き取った親父は勝手に、ゆっゆっ行方不明になっちゃうしよ。それで、親父の方のバーちゃんに育てられたんだよ。だから、バーちゃんに、そっそっそんな事まで心配かけたくなかったから、家ではずっと黙っていたよ。いっいっいじめられていた事を……
ああ、そうそう、教師が助けてくれるとかは一回も無かったよ。だって、僕がいじめられるのは当たり前の空気だったから、何も助けてくれなかった。でも、それでも、中学の時はまだ良かったな。だって、結局は構われていたんだからさ。

高校の時なんか結構ひどいよ。確かに中学や小学の時みたく、めっめっ目に見える、いっいっいじめは無かったけれど、代わりにあったのは、僕に対する徹底的な無視だった」

無視の方がまだいいのではないか？僕はそう思ったのだが、彼は僕の心情をまたしても読み取り「君は無視の方がいいと思ってるかも知れないけど、むっむっ無視の方が傷付くよ。肉体ではなくて、精神的にね」

「でも、ナッナッ殴られなくて、良かったじゃないの？」

「まあ、その点はね。でも、無視はそれすらも超えていて、僕なんかいなくてもいいような世界にするというのが無視というものでね。反対に肉体的ないじめは、僕でなければ、出来ないものだった。良い言い方をすれば、僕がいなければ成立しない。まあ、必要とされているようなもんだな、イジメっ子に」

何か、彼の言い方が理屈っぽくなって来て、正直、頭が痛くなって来た。だが、彼はそんな事はお構い無しに話を延々と続けていった。

「それで、高校の時は卒業するまで無視といういじめだった。尤も、これが初めてというわけでなく、中学の時にクラスの女に無視されているというのはあったけど、まさか、三年間ずっと、無視されるとは思わなかった。で、高校を卒業したら、麺を扱っている会社に僕は就職をするんだけど、ここでは、少しでもミスをしたら、説教の嵐って奴？それが、吹き荒れるんだけど、まあ、こちらとしては、金を貰っている身分だからさ、大人しく従うしかないけど。しかも、明らかに、僕が障害者というだけで気に食わないから、説教をしているオバさんなんかもいるけどさ。それは、仕方ないと思ってるよ。だって、僕は、障害者なんだからさ」

ねじ曲がっている。彼の話を一通り聞いた後、感じた感想は、それだった。僕が思い付かない様々ないじめや苦難を乗り越えて、今の今まで生きて来た結果が、ねじ曲がった性格の人間の誕生だった。色で表現するなら、白と黒を掛け合わせた、灰。そうだ、名字通りに、彼は、灰野だった。僕は、その灰野にどうしても聞かなければいけない事があった。そう思って、彼に聞こうとすると、何時の間にか彼はその場からいなくなってしまっていた。まるで、僕が彼と出逢った事が夢であったかのように。

ふと、腕時計を見れば、四時を過ぎたばかりだった。でも、僕は、彼と話した気だるさから異常な疲れを感じていたので、そのまま、家に帰って、夕食や風呂にも入らないで寝てしまった。翌日、起きても気だるさが取れなかったので、熱を測ったら、85度くらいあったので、初めて、ぽのすを休む事にした。

休んで行った家の近くの病院に行って来たのだが、何だか、気のせいか、看護婦さんや医者の態度が威張っているそんな感じだった。今までは、僕に対して、優しかったような気がしたのだけれど。何か、今日は極端にそう感じてしまった。
別に、灰野のように殴られたりするわけではなく、普通に僕を診察したり、普通に僕と接したりしていたと思うけれど、何か、微妙に違うのだ。
お昼頃、家に帰っても、その微妙さを考えていたのだけれど、何も分からなかった。

もしかしたら、自分の思い違いなのかも知れないと思い、少しでも気を紛らわそうと思って、テレビを点けてみたら、ニュースがやっていた。そのニュースをボンヤリと見ていると、『疑惑の政治家捕まる』というテロップが現われた。それを見た、というか、『疑』という文字を見た瞬間に、僕は閃いた。
それは僕は今まで、自分は誰からも好かれているという思い込みの元で生きていた、という閃きだった。僕はその事を信じていたし、間違っていなかったようにも思われる。しかし、『疑』という文字を見た時、その事は間違いだったように思う。

そうだ、バスの小学生だって、あの時は僕の周囲の何かを馬鹿にしたように笑っていた、そう感じた。でも、本当は違っていた、僕自身の真似をし、その僕自身の反応を笑っていたのだ。ひまわりに行く時に出会った親子連れだって、僕の方角ではなく、僕自身を見て、あのような態度を取っていたのだ。灰野を追い掛けた時、ブロックにつまづいた時だって、周囲は、僕自身を笑っていたのだ。
僕は今の今まで、自分は愛される人間だと信じて、疑わなかったような気がする。でも、実際は、違っていたのだ。自分は愛されているのではなく、保護されているのだ。障害者だから。障害を持っている人間が愛されるわけは無かった。
そう思ってからすぐに、僕はこう思い直していた。いや、中にはもしかしたら、僕を馬鹿にしたりとか、そういう人がいるかも知れないけど、僕の事を実際に、愛している人達だっているだろう。例えば、親や温水先生や馬場さんとかいる筈だった。

いや、親だって、何か魂胆があって、僕を愛しているのかも知れない。温水先生や馬場さんだって、ひまわりの運営の為に、僕に優しく接しているだけかも知れない。
そう思えば思う程、僕にはもう何が何だか、分からなくなって来た。
その感情は、白と黒が入り交じった灰色のようなものだった。僕の心が灰色に染

まって行く、それを感じれば感じる程、何故か、どんどん、熱が下がって行くような感じがした。多分、この分だと僕は明日は職場に行けるようになるだろう。しかし、僕は今まで通りの心で、同僚達と接する事は出来ないと思う。それが、正しいのかどうかは僕には分からない。しかし、間違ってはいないと思う。

何故なら、どう考えても、あの男、灰野誠一は、はっきり言って僕は嫌いではあるけれど、彼の考えは、間違ってはいないと思えたからだし、僕は、今後とも、彼の考えを、少しでも理解して、行動しようと思う。

灰野に、もし、また、再会する機会があったら、本当の意味で、友達になれると思う。そして、その時こそ、僕は、障害者としての、新たなる一歩が踏み出せそうな気がした。